

そして、特筆されるのは(37)と(38)である。現在地比定は容易でないし、具体的な内容なども明らかでないが、いわゆる南島人がもたらした何らかの「方物」に付けられたものであることは明らかである。とすれば、これらは律令国家と南島との交渉、あるいは南島人の来貢のあり方などを考える上で重要な意味をもつと言えるだろう。

9 関係文献

九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和五九年度発掘調査概報』(一九八五年)

(倉住靖彦)

『平城宮木簡 四』の刊行

平城宮跡出土木簡の正報告書としての第四集が刊行された。

対象となるのは昭和四一年に宮の東南隅で実施された第三三次補足調査で出土した木簡である。同調査では宮の南を限る大垣の北を流れる東西溝から一万二千点をこえる大量の木簡が出土した。削屑がその大半を占めるとはいえ、式部省で行われる考課・選叙の関係木簡がまとまって出土している。すでに『平城宮発掘調査出土木簡概報』四の中に釈文の一部が略報告されているが、その正報告書にあたる。同調査の一万二千点余の木簡を一冊でまとめるることは困難なため、三分冊に分けて刊行することとなり、『平城宮木簡四』はその第一分冊である。約二千五百点の木簡の写真図版と別冊の「解説」よりなり、「解説」には遺構の概要・考選木簡の分析・釈文等が掲載されている。

奈良国立文化財研究所発行

去る七月二四日と二六日、第一四回古代史サマーセミナーが栃木県鹿沼市で開かれた。その中で「在地社会と文字資料—東国を中心として—」と題して、関東地方の文字瓦・墨書土器・漆紙文書・木簡を題材とした報告が九本準備され、レジュメ集が作られた。

奈良市橋本町三六番地

新明新印刷

(コロタイプ図版一二〇枚 解説A五版・本文四一四
頁 一九八六年三月刊 頒価二五、〇〇〇円、一、五
〇〇円 解説のみ三、六〇〇円、一四〇〇円)